所長挨拶

メディアセンターの重要性

田中（たなか）　敏幸（としゆき）
（理工学メディアセンター所長）

2021年10月より，理工学メディアセンター所長を仰せつかりました物理情報工学科の田中敏幸です。前任の笹瀬巌先生をはじめ，歴代所長のリーダーシップのもと，日本有数の理工学系図書館として認知されている理工学メディアセンターを，さらに発展できるように努力してまいりたいと思いますので，どうぞよろしくお願い致します。

私は1978年に慶應義塾大学工学部に入学し，1980年から矢上キャンパスに通っています。当時はまだ松下記念図書館という名称でしたが，そのころからメディアセンターを利用しています。私の学生時代の図書館は，知の宝庫というイメージの場所でした。実験レポートの参考図書を閲覧したり，研究に必要な論文を探したりしました。その当時に疑問だったことは，学会の論文集や書籍などが年々増えていったとき，図書館はどのように貯蔵していくのだろうということでした。古い雑誌は保存書庫に移しているということは知っていましたが，雑誌の大きさや量を考えると，図書館がいつまで耐えられるのか想像ができませんでした。ちょうどそのころ，スパイ映画などでは超小型マイクロフィルムへの保存が流行っていた時期で，いずれは図書館もそのようなメディアを利用するのかもしれないと，勝手な想像をしていました。その時の私の知識では，現在のネットワークやクラウド技術，情報メディアなどを想像することは全くできず，いまさらのように技術革新のすごさを実感しております。

私の専門分野として，画像解析・画像計測が研究の中心となっています。メディアセンターと画像計測はあまり接点がないかと思っていたのですが，最近のセキュリティ技術や，入館のバーコードの読み取りなど，いろいろなところで画像解析の技術が利用されています。気が付くと次々と新しい技術が導入されており，まさにメディアセンターという名前そのものになっているように思います。多くの革新的な技術が現れるたびに，メディアセンターとしてどのような技術を導入するかを検討しなければなりません。また，導入するだけでなく，それらを使いこなして，メディアセンターを利用する人へのサービスを行わなければなりません。一つの新技術が導入されるだけでも，使いこなすまでに相当な努力が必要なので，メディアセンター職員の方々の献身的な努力には感謝いたします。

私自身，メディアセンターが今後どのように発展していくかについて非常に興味を持っています。世界的に美しいという評判のある図書館でも，紙媒体の書籍の陳列の美しさが述べられている場合が多いような気がします。先にも記述しましたように，これからの図書情報は紙媒体がなくなり，ほとんどがディジタル情報に代わっていくことが予想されます。そのような未来社会では，どのような図書館・メディアセンターが美しいと言われるのか，現時点では想像ができません。また，必要図書や文献の探し方についても，私が学生の頃は，自分に関連のある雑誌を開いて，論文のタイトルやアブストラクトを読んで探したものですが，いまはキーワードで検索します。しかし，学生がキーワード検索をしているのを見ると，必要な図書・論文をうまく検索できているとは言えません。情報技術の発展によって，もっと便利な検索機能ができることを期待しています。

理工学メディアセンターは，前所長の笹瀬巌教授を中心とした多くの取り組みによって，「学生や教職員の知的好奇心を高める場所」となっています。私自身もこの取り組みは継続していきたいと考えています。それに加えて，メディアセンターが進んでいく道を考え，知の拠点であるだけでなく，卒業後も印象に残る，大学内で一番好きだった場所になるように取り組んでいきたいと考えています。今後もご支援をいただきますよう，どうぞよろしくお願い申し上げます。